Advanced Tourism Studies No.1

観光創造研究

≪論文≫

中国における民族音楽の伝承と観光活用

雲南省麗江市玉龍納西族自治県黄山鎮白華村における ナシ古楽ツーリストコンサートの成立経緯と課題に関する研究

Dissemination and Tourism Use of Ethnic Music in China:

A Study on the Development Process and Future Challenges of the *Naxi* Ancient Music Tourist Concert in Baihua Village, Huangshan, Yulong *Naxi* Autonomous County, Lijiang, Yunnan Province

山村高淑

Takayoshi YAMAMURA

Center for Advanced Tourism Studies
Hokkaido University

北海道大学 観光学高等研究センター

観光創造研究 No.1≪論文≫
2007 年 8 月 20 日
Advanced Tourism Studies No.1
20/08/2007

中国における民族音楽の伝承と観光活用

雲南省麗江市玉龍納西族自治県黄山鎮白華行政村における ナシ古楽ツーリストコンサートの成立経緯と課題に関する研究

Dissemination and Tourism Use of Ethnic Music in China:

A Study on the Development Process and Future Challenges of the *Naxi* Ancient Music Tourist Concert in Baihua Village, Huangshan, Yulong *Naxi* Autonomous County, Lijiang, Yunnan Province

山村高淑
北海道大学観光学高等研究センター准教授

Takayoshi Yamamura
Associate Professor,
Center for Advanced Tourism Studies,
Hokkaido University

【要旨】

本稿は、地域開発政策の下に急激な観光地化が進行している中華人民共和国の雲南省において、農村民俗観光開発で最も成功しているとされる麗江市玉龍納西（ナシ）族自治県黄山鎮白華行政村を対象として、少数民族ナシ族の民族音楽と民間音楽組織に着目し、その変遷過程と観光開発との関わりについて、実地調査および文献調査に基づき検証したものである。その結果、地域住民自身が自律的に伝統的組織の再構築を行いツーリストコンサートの実施には至っているものの、地域住民と地元行政との関係性や、マクロな経済システムとの調整を取る組織や方法が曖昧な情況であること、地域住民自身の意見を集約し、それを開発計画に反映する方法が確立されていないこと、などが課題として存在することが明らかになった。これらの知見を踏まえた上で、本稿の結論として、当地の伝統的民族音楽に基づくツーリストコンサートを持続的に発展させていくためには、伝統的な集落の範囲を重視した上で、当事者の意見集約が可能となる組織の設置が早急に望まれることを提言している。

キーワード：麗江、雲南、ナシ族、民族音楽、ナシ古楽、ツーリストコンサート

【Abstract】

This paper examined the relationship between the process of transition and the development of tourism based on field researches and a bibliographic survey targeting Baihua Village, Huangshan, Yulong *Naxi* Autonomous County, Lijiang, that is considered to be the most successful in settlement tourism development, and focusing attention on the popular music organization and the ethnic music of the ethnic minority, the *Naxi* people. As a result, although this lead to the realization of the tourist concert with the local residents autonomously restructuring the traditional organization, the existence of some challenges came to light. These are the relationship between the local authorities and the local residents, the fact that the situation in which the method and organization that is to adjust this with the macro economic system are ambiguous, and that the method to reflect the consolidated opinions of the local residents into the development plan has not been established. In conclusion, this paper suggests that upon considering all this knowledge, in order to continuously develop the tourist concert based on the traditional ethnic music of this area, it is desirable to immediately establish an organization that will make the consolidation of opinions of all those concerned, possible, by putting emphasis on the area of the traditional settlement.

Key words:

Lijiang, Yunnan, the *Naxis*, Ethnic Music, the *Naxi* Ancient Music, Tourist Concert

1. はじめに

1.1. これまでの経緯と本稿の目的

筆者はこれまで、中国雲南省麗江市農村部（麗江市玉龍納西族自治県黄山鎮白華村[1]）を対象に、地域の文化資源・農業資源を活用した観光開発の経緯とその方式、地元行政、旅游開発公司（観光開発会社）の役割と住民の主体性発露のあり方について現地調査を行なってきた。その成果の一部は、山村（2004）として公表している。本稿はその続編をなすものであり、特に住民である少数民族納西族（以下、ナシ族と表記）[2]の民族音楽と民間音楽組織に着目し、その変遷過程と観光開発との関わりについての調査結果を報告するものである。なお本稿で言う「民族音楽」とは、近年の文化人類学分野における広義の定義[3]に従い、「一定の民族に存在するすべての音楽」を指すものとし、様式性や伝習構造が比較的明確で固定性のあるものを、特に「伝統的民族音楽」と呼ぶものとする[4]。

もともと黄山鎮は「納西楽舞之里（ナシ族音楽と舞踏の故郷の意）」と呼ばれるほど[5]、民間音楽組織による伝統的民族音楽の演奏活動が盛んな土地柄で、白華村の観光活動においてはこうした民族音楽、通称「納西古楽（以下、ナシ古楽と表記）」の鑑賞がひとつの目玉となっている。本稿では具体的にこうした既存の民間音楽組織に焦点をあて、どのように観光開発に関わりはじめ、民族音楽を商品化してきたのか、そしてどのような問題を抱えているのか、検証してみたい。具体的には第 2 章においてナシ族の伝統的民族音楽の分類を行い、現在までどのような形で伝承されているのか整理し、続く第 3 章では白華村で行なわれているツーリストコンサートの成立経緯と経営実態について明らかにしたい。そして第 4 章では白華村に設置が計画されている「伝統芸能博物館」を巡る地域の葛藤を把握することで、地元行政・旅游開発公司・住民の関係性がはらむ問題点を浮き彫りにすることを試みる。

本邦においてナシ族の民族音楽と観光開発の関係性について論じた研究は、山村（2004）ならびに宗（2007）によるものがあるのみであり、中国においても有用な研究としては高

---

[1] 2002 年 12 月 26 日、国務院は麗江における行政区画の変更を批准。2003 年 4 月 1 日付けで、麗江納西族自治県が「麗江市古城区」と「玉龍納西族自治県」に分割された。これに伴い、「麗江納西族自治県黄山郷」は「玉龍納西族自治県黄山鎮」となった。本稿では 2003 年 4 月 1 日以前のデータも扱うが、混乱を避けるために、特に必要の無い限り、本文中では新区画名に統一して表記するものとする。ただし文献名を表記する際には、出版当時の呼称で表記する。

[2] 中国語表記は「納西族」であるが、これはナシ語の民族呼称「ナシ」に、音の近い漢字を当てたもの。本稿では原語がナシ語であることを考慮して以下「ナシ族」と統一して表記する。ナシ族は独自の言語、文字、宗教を有する、総人口約 27 万 8 千人（1990 年現在。郭ほか 1999: 419-421）を数える少数民族で、古代羌族が南下して雲南省西北高原を中心とした地域に定住した民族であると言われる。

[3] 石川ほか(1994), pp. 752-753。

[4] なお、「伝統的」「民族音楽」ともに定義については様々な議論がなされている用語であり、研究分野や立場によっても用法が異なっているのが実情である。こうした用語の定義について議論を展開することは本報告の目的の範囲を超えるため、これ以上の議論は別の機会に譲ることとし、本報告では便宜上、ここに示した定義を用いるものとする。

[5] 1980 年に中国の著名な画家、呉作人氏が当時の黄山郷を訪れナシ古楽を鑑賞。黄山郷を「納西楽舞之里」と命名したことに因む。

（2001）がある程度である。したがって、本稿で報告する現地データの多くは、日本においてのみならず、中国においても未公表のものであり、非常に高い資料価値を有していることも申し添えておく。

1.2. 調査対象地域について

本研究は研究対象地として、麗江市玉龍納西族自治県黄山鎮白華行政村[6]（以下便宜上、特に必要の無い限り、白華村と呼ぶ）を取り上げる。白華村は、1997 年に世界文化遺産に登録された麗江旧市街地[7]から西南に約 3km のところに位置する、ナシ族の伝統的農村集落である（図 1)。人口は 3,116 人、809 戸からなる（1999 年末現在。高 2001：24-25)。白華行政村はさらに 8 つの自然村（尚義、武栄、文栄、吉来、金龍、中心、開文、加楽）に分割され、これら 8 つの自然村のうち、文栄、吉来自然村を中心とした地区において、目下観光開発が進められている[8]。

白華村では 1990 年代後半より観光開発が進み、1999 年からは生活の場としての伝統的集落を、そのまま「黄山納西族民俗文化旅游村」（通称「白華納西民俗旅游村」。以下、便宜上「白華民俗村」と称す）として一般開放することで、観光客の誘致を行っている。少数民族であるナシ族の伝統文化・習俗を現在でも色濃く継承している地域であり、目下、麗江県のナシ族集落の中では、民族芸術（特に音楽や舞踏）が住民の手により伝承されている点で広く知られた集落となっている。実際、地元行政も白華村に伝承されるナシ族文化を高く評価しており、1997 年にノルウェー国王夫妻が麗江を訪問した際の視察先の一つとして指定、これを成功させて以降、ジプチ大統領やタイ王国国会議長など、国内外の要人が麗江を視察する際の重要な訪問先の一つとしての地位を確立している（高 2001：52-55）[9]。

1.3. 調査方法

本稿で公表するデータは、2000 年より筆者が継続的に行なっている調査（文献調査ならびに現地調査）に依るものである。現地調査では、主として農村住民および関連する行政担当者に対するヒアリング調査ならびに、農家滞在を通した観光活動の定点観測によるその実態把握を行っている。またヒアリング調査は筆者個人が中国語（普通話）によって行

---

[6] 黄山鎮は麗江旧市街地の西側から西南側にかけて隣接して広がる、平均標高約 2,400m、面積約 92.2k ㎡の地区で、6 つの行政村（白華、文華、黄山、中済、長水、南渓）からなる。

[7] 白華村は世界文化遺産の登録範囲には含まれていない。

[8] なお「行政村」「自然村」は中国における現行の農村の行政区分である。中国では一般に、「省」の下で実質的な行政活動を担当する単位である「県」の下部の行政単位が、「鎮」や「郷」といった、ひとつまたは複数の市街地および村落により構成される地域である。そして、小都市の人口集中地区を「鎮」、農村のそれを「郷」と呼んでいる。さらに、その「郷」のひとつ下の行政レベルが「行政村」であり、国家が住民による自治を保障している「居住区」に当たる（全国人民代表大会常務委員会（1999 年）「中華人民共和国城市居民委員会組織法」に基づく)。また「行政村」はさらに小規模の複数の「自然村」から構成されるのが普通である。

[9] なお、白華村の基本概況（行政区分と観光行政主管部門の位置付け、社会経済概況、観光産業の概況等）については山村（2004）にて詳述しているのでそちらを参照されたい。

った。

なおヒアリングを行なった日時については本文中の当該箇所にその都度記載するとともに、ヒアリング調査対象者氏名の表記については、公人としての発言の場合で、且つ本人に論文掲載の了承が得られた場合のみ実名を記すこととし、それ以外の場合はアルファベットを用いた仮名表記とした。

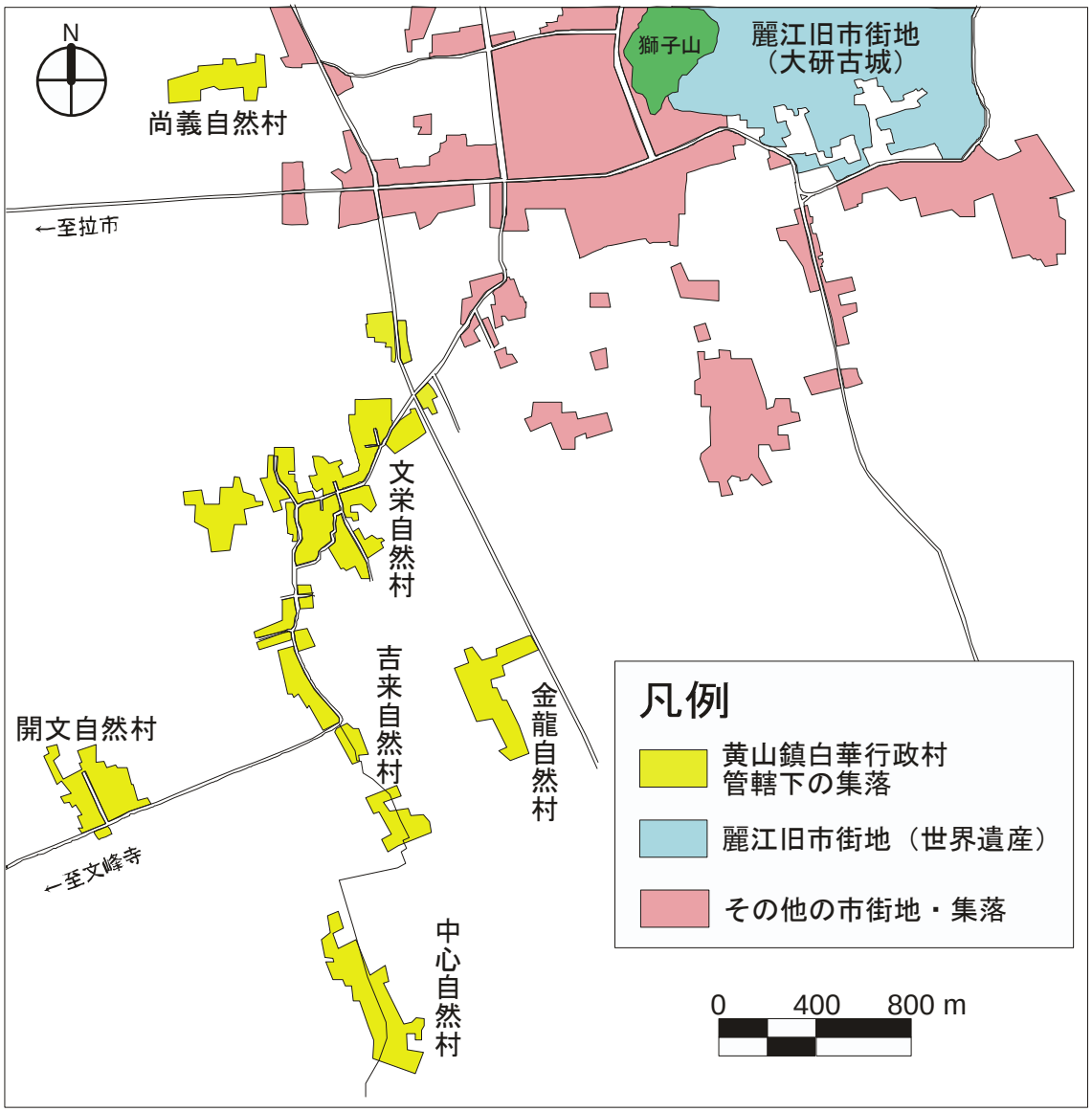

図１　黄山鎮白華行政村広域図

（出所）山村（2004），p. 16 を基に筆者作成

2. ナシ族の伝統的民族音楽： その分類と伝承プロセス

「ナシ古楽」は黄山鎮のみに固有なものではなく、ナシ族社会に広く伝承されている音楽である。まず本章では、ナシ古楽を含めた、麗江で行われてきた伝統的音楽活動の歴史をその社会的機能と組織形態に注目して分類し、特徴についてまとめておく。

2.1. ナシ族の伝統的民族音楽の分類

ナシ族の伝統的民族音楽は大きく「ナシ古楽」と「トンバ舞」、「民間舞踏」の 3 つに大別できる。以下その特徴を簡単にまとめておく。

(1)ナシ古楽：

ナシ古楽とは、ナシ族の土着の音楽であり舞踏も含む「白沙細楽」と、元代以降に中原（中国の中央）から伝わったとされる宗教音楽（道教音楽）である「麗江洞経音楽」の二つからなる。いずれも複数の楽器演奏による合奏形態をとるが、両者の特徴を簡単にまとめると以下のようになる。

①白沙細楽：

ナシ族の民間に伝わる最も古い組曲で、ナシ族は「ボシシリ」（漢語での音写は“崩石細哩”あるいは“崩時細哩”などと表記）と呼ぶ。その起源については未だ明らかになっていないが、史書の記載や民間伝説等から、有力な説として以下の 3 つがあるとされている。(a)蒙古音楽（元の時代にモンゴル人によってもたらされたとする説）、(b)ナシ族民俗音楽説（ナシ族自身が民間で創作した楽曲であるとする説）、(c)漢族音楽（明代に移民してきた漢族によってもたらされたとする説）。清代以降の記録によれば、白沙細楽はその演奏目的を以下のように歴史とともに変化させてきていることがわかる。①民間歌舞→②土司儀礼音楽（政治儀礼音楽）[10]→③民間音楽→④喪儀における儀式音楽→⑤鑑賞性音楽。現在は民間では主に④の目的で演奏され[11]、観光向けに⑤の意味を持ち始めている[12]。

②麗江洞経音楽：

・明代から清代にかけて中国の中央から伝わった宮廷音楽で、後に道教における読経の際に演奏されるようになった。音楽形式としては、中国の他の地域では早くに消失してしまった唐宋時代の音楽を継承しており、「中国音楽の活きた化石」とも呼ばれている。道教経典「玉清無極総真文昌大洞仙経」略称「洞経」を読む際に演奏したことから「洞経音楽」と呼ばれる[13]。

---

[10] 元から明、清初までの 341 年間、中央朝廷から世襲知事の官職「土司」を与えられたナシ族首長（王族）による政権において公式儀礼の際用いられた音楽。
[11] 現在でもナシ族の葬儀の場合には白沙細楽が演奏されることが多い。
[12] 高(2001), p. 137。
[13] ナシ古楽の詳細については、麗江県共産党委員会・麗江県人民政府(2000), pp. 444-470 を参照。

・白沙細楽が主に民間で伝承されてきたのに対し、洞経音楽は当初宗教的な組織によって伝承されて来た点が特徴である。

(2) トンバ舞

トンバ教における祭礼舞楽。自然崇拝を中心とするナシ族固有の宗教「トンバ（東巴）教」において、男性祈祷師「トンバ」が祭祀儀式において行う舞[14]。

(3) 民間舞踏

ナシ族は婚礼や祭典、恋人探し等の場において、焚き火を焚き円陣を組んで歌を唱い踊りを踊る習慣がある。代表的なものにアリリ、ダラリ（円になって手をつないで踊る、フォークダンスのようなもの）、ズーツォルー（若者が円陣を組んで激しく踊るもの）」などがある[15]。

2.2. 麗江における伝統的民族音楽の伝承組織とその歴史的変遷

麗江における民間音楽組織の変遷年表を表 1 に、ナシ族伝統音楽の分類と観光客向けの演奏活動（以下「ツーリストコンサート」[16]）を行う音楽組織の成立経緯を図 2 にそれぞれ示す。またナシ族伝統音楽に関連する組織名称の解説を表 2 として補足しておく。麗江における民間音楽組織の変遷は、とくに洞経音楽に関わる組織形態とその活動目的に着目すると、大きく以下に示す 6 つの時期区分を行うことができる。

(1) 第一期（17 世紀以前）：宮廷音楽と民間音楽期

まず第一期は明代以前（17 世紀以前）の時期である。唐王朝の宮廷音楽が 1527 年に初めて麗江にもたらされ、木氏土司政権において公式儀礼の際に用いられるようになる。なおこの頃はまだ一般住民に洞経音楽は演奏されていない[17]。一方民間では、「ボシシリ」（後の白沙細楽）が集落ごとに民謡、儀礼・葬礼音楽として演奏されていた。この「ボシシリ」は極めて生活に密着した音楽であるため、その後も特に組織化されることはなく、集落内の男性により演奏されている[18]。

(2) 第二期（1723～1911）：宗教性礼楽期

この時期は洞経音楽が宗教音楽として民間で演奏されはじめ、民間の演奏組織が設立される時期である。1723 年に麗江の地方政権がナシ族の木氏一族から清王朝中央政権が派遣

---

[14] 李(1999), pp. 105-106、郭(1998), pp. 120-122。
[15] 郭(1998), pp. 130-131、麗江県共産党委員会・麗江県人民政府編(2000) pp. 471-486。
[16] 日中両国で活動する、ナシ古楽研究の第一人者で、音楽家・音楽人類学者の宗婷婷氏はその著作の中で、観光客向けの演奏活動のことを総称して「ツーリストコンサート」と呼んでいる。宗(2007)。本稿でもそれに従いたい。
[17] 麗江県共産党委員会・麗江県人民政府編(2000), pp. 444-470。
[18] 高(2001), pp. 136-139。

表１　麗江における伝統的民族音楽に関する組織の歴史

第 1 期《宮廷音楽と民間音楽期》	
明代以前	○ナシ族の民間音楽「ボシシリ」として民間の民謡、儀礼・葬礼音楽として集落ごとに演奏されてきた。
1527 年	○麗江土司である木公が北京に人を派遣し、宮廷祭祀音楽を習わせるとともに、楽師麗江へ招く。これが麗江の洞経音楽の始まりとされる。
第 2 期《宗教性礼楽期》	
1723 年	●清雍正元年、「改土帰流」政策により麗江の地方政権がナシ族の木氏一族から清王朝中央政権が派遣する地方長官へと移行された。これに伴い、宮廷音楽もその意味を変え、民間の宗教礼楽として用いられるようになり、ナシ族の民間社会に「麗江洞経会」と「麗江皇経会」が設立される。
第 3 期《民間娯楽音楽期》	
1911 年	●辛亥革命に伴い「洞経会」活動が禁止されるが、住民は「麗江音楽会」と名称を変えて活動を続ける。 ○この頃から新中国成立(1949 年)までの間、麗江地区の広い範囲で、民間の「楽会」が盛んに設立される。1940 年代には麗江地区で 100 以上を数えた。→現在のコミュニティ古楽会の直接の母体。
1923 年	■白華村（当時の白華郷）に「白馬洞経会」が成立。その下に文栄村古楽隊、吉来村古楽隊の 2 団体が置かれる。
第 4 期《停止期》	
1949 年～	○新中国の成立に伴い、音楽団体の組織的演奏活動は次第に衰える。 ○ただし文革開始時までは、祭典時の余興や政府行事等での演奏、民間での純粋な娯楽演奏の形式は存続した。
1958 年～	○大躍進政策による農村の人民公社化、続く文化大革命などにより、麗江における音楽組織は全て解散、ナシ古楽活動は完全に停止する。
第 5 期《復興期》	
1970 年代末	■文化大革命が終結して程なく、MD 氏が白華村でナシ古楽の復興にかかる。 ■他の集落に先駆けて白華村において、和民強氏により自宅で老人演奏家による古楽演奏会が開催される。
1980 年	○麗江の地方雑誌「玉龍山」に MD 氏が書き起こしたナシ古楽の楽譜の連載が始まる。 ○この頃から他の集落においてもナシ古楽の民間演奏が復活し始める。 ■呉作人氏（画家）が黄山郷を訪れ古楽を鑑賞。黄山郷を「納西楽舞之里」と命名する。
1984 年	●宣科氏等により「大研納西古楽会」が再結成される。
第 6 期《ツーリストコンサート成立期》	
1988 年	●宣科氏率いる「大研納西古楽会」が観光客も含めた対外演奏会を開始する。
1990 年	■麗江県民間合作社と黄山郷白華村、長水村が共同で「中国工合国際旅游民間納西古楽演奏会」を開催。
1998 年	●五一街文治巷古楽会を母体に「東巴宮」が設立され、毎晩、旅客向けに白沙細楽の演奏を開始する。
1999 年	■9 月、黄山郷白華村民間歌舞隊（民間）が設立される。 ■12 月、黄山郷表演隊（黄山旅游公司の一部）が設立される。
2000 年	■黄山郷納西古楽隊が東巴文化伝習院にて正式に活動を開始、老人から若者への伝承を目指す。 ○この頃になると、麗江県下のほとんどの郷鎮、街道、農村において古楽会・打跳隊が復活した。
2003 年	○行政区画の変更が行なわれ、4 月 1 日より、麗江納西族自治県が「麗江市古城区」と「玉龍納西族自治県」に分割される。 ■これに伴い、「麗江納西族自治県黄山郷」は「玉龍納西族自治県黄山鎮」となる。「黄山郷村民俗旅游開発有限公司」も「黄山鎮郷村民俗旅游開発有限公司」に名称変更。

(注) ○：麗江全域に関わる事項、●：大研古城に関わる事項、■：黄山鎮に関わる事項

(出所)以下の文献ならびに黄山鎮旅游開発公司(2000 年 6 月)、大研納西古楽会(2001 年 9 月)、東巴宮(2001 年 9 月)、白華民間歌舞隊(2001 年 10 月)におけるヒアリングに基づき筆者作成。趙(1984),p.154、高(2001),pp136-139、Ge:戈,和(2000),pp.150-151、麗江県共産党委員会・麗江県人民政府編(2000),pp.444-470、黄山郷人民政府(1998)、黄山郷人民政府(2000),p.10、雲南省麗江地区行政公署・雲南省麗江地区地方誌弁公室(1998),p.220、雲南省麗江地区行政公署・雲南省麗江地区地方誌弁公室(1999),p.220

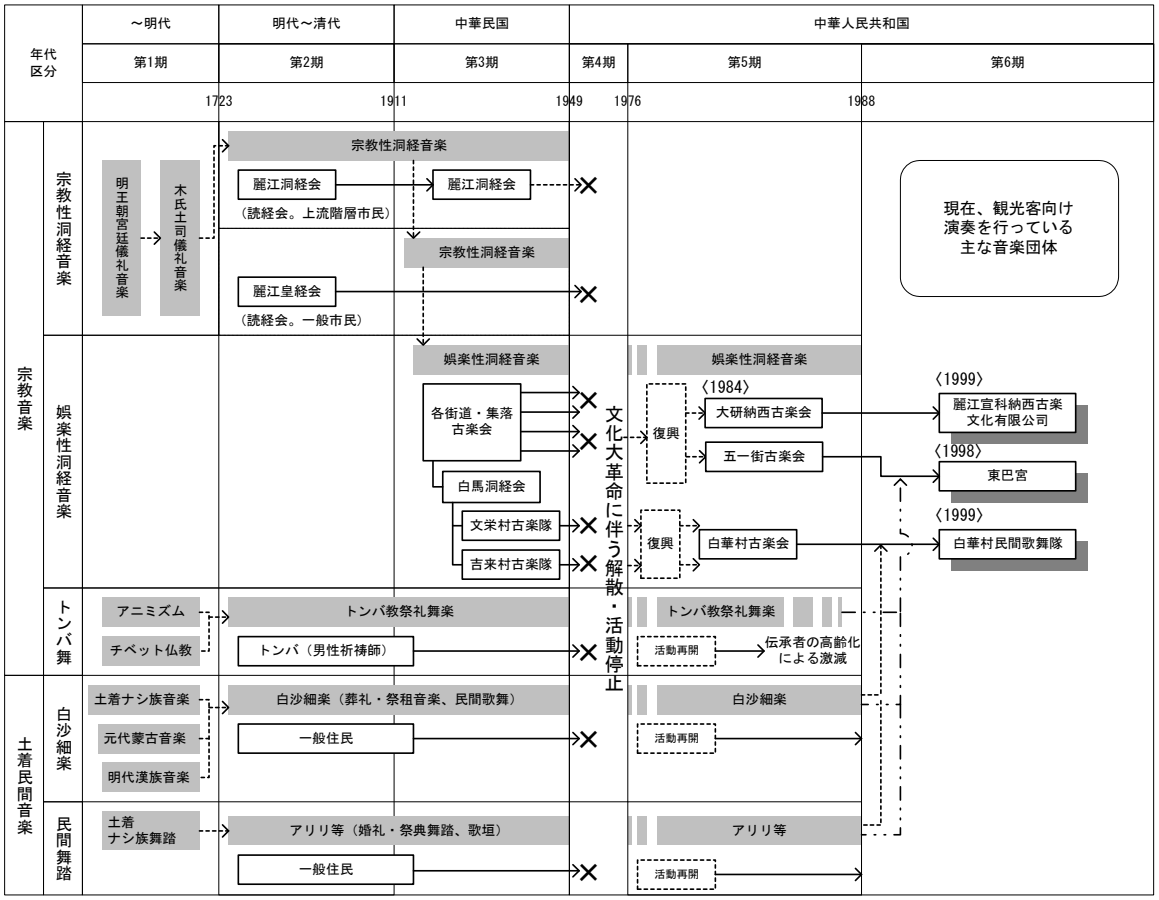

図 2　ナシ族の伝統的民族音楽の分類と観光客向け演奏活動を行う音楽団体の成立経緯

（出所）表 1 に同じ。

する地方長官へと移行されたのに伴い、それまで木氏土司政権内で演奏されていた宮廷音楽が民間に流出、その意味を変え、道教の読経時に伴奏として用いる宗教礼楽として用いられるようになる。この時期に、ナシ族の民間社会に洞経音楽を演ずる最も初期の正式な団体（読経会）として「麗江洞経会」が設立されている[19]。この会は、官吏、名士、文人および富豪の子弟など、政治・経済的地位の高い、麗江の一部上流階層から構成されており、自ら演奏を行い、その音楽に合わせて道教経典を読む宗教性礼楽活動を行っていた[20]。一方、中小企業主や一般の文化人、手工業者など、政治・経済的地位の高くない一般市民は「麗江皇経会」という組織を形成した。ただしこちらは 1930 年代前後に至るまで、木魚や笛のみを用いた読経を行い、洞経音楽の演奏は行っていなかったとされる[21]。なお当時の礼楽活動は男性のみによって行われるものであり、またナシ族社会においては楽器演奏は男性の文化であったことから、いずれの読経組織も男性のみで構成されていた[22]。

---

[19] 趙(1984), p. 154。
[20] 麗江県共産党委員会, 麗江県人民政府編(2000), pp. 444-470。
[21] *Ibid.*
[22] ナシ族社会には伝統的に男性は外部での政治・文化的活動、女性は家事および農作業などの肉体労働と

表 2　ナシ族の伝統的民族音楽に関連する組織名称

土司	元・明・清代、西南地区の少数民族の首長で、中央より世襲の官職を与えられた者を指す。少数民族地区を支配するために、首長を王朝の官員となした。麗江においては、「通安州」（当時の麗江一帯の州知事「阿甲阿得」が、明の朱元璋皇帝より「木」姓を賜り、世襲州知事として封じられたことに始まる木氏一族が清の雍正元年（1723）まで、18 代 341 年に渡り統治を行う。
洞経会	「談経会」「文人会」とも。洞経音楽を演ずる最も初期の正式な団体。その成員は官吏、名士、文人および富豪の子弟など、政治・経済的地位の高い、麗江の一部上流階層から構成されていた。「洞経」とは道教経典「玉清無極総真文昌大洞仙経」の略称で、洞経音楽とはこの「洞経」を音楽に合わせて読む宗教性礼楽活動。
皇経会	中小企業主や一般の文化人、手工業者など、政治・経済的地域の高くない一般市民から組成された読経会。本来、木魚や笛を用いた読経を行い、洞経音楽の演奏は行っていなかったが、1930 年代前後に洞経音楽の調べの美しさが広く受けたことに起因してこれを取り入れるようになったと言われる。「皇経」とは道教経典「太上洞玄霊宝高上玉皇本行集経」の略称。
楽会	中華民国期(1911～1949)に麗江地区で盛んに設立された民間の住民音楽団体。音楽愛好者が自発的に組織した娯楽性の高い洞経音楽団体。そのうち実際に道教の読経を行う団体は少なく、多くは全く宗教性を有さないもので、祭典時の余興や余暇の娯楽として楽しまれていた。参加者は商業従事者から農民まで社会の広い層に渡り、この時期にこれまでの富裕層の音楽であった洞経音楽が地域社会に広く普及し、純粋な民間音楽であった白沙細楽が「ナシ古楽」として一緒に演奏されるようになった。
古楽会	文化大革命終結後、復活した楽会を特に古楽会と呼ぶ。特に観光商品としての「ナシ古楽」という呼称が定着しているため、現在一般に「古楽会」と呼ぶ。宗教性を有するものはほとんど無く、住民の自発的組成による娯楽組織である。近年は特に観光商品としての価値を有してきたことから、観光客向けに演奏を行うプロの楽団も現れている。
打跳隊	歌舞団のこと。ナシ族は婚礼や祭典、恋人探し等の場において焚き火を焚き円陣を組んで歌を唱い踊りを踊る習慣がある。これは地域社会の中で誰もが自然に修得しているもので、本来、専門の歌舞団なるものは存在しない。近年、観光地化が進むに連れ、こうした歌舞がひとつの観光資源となり、旅客に見せることや、公式行事に参加し演技する機会が増え、コミュニティごとに自発的に組成されるようになった。白華村ではその下の各自然村毎に存在する。プロ組織でない限り、実際のところ、コミュニティにおいて古楽会と打跳隊の成員はほぼ一致する。

（出所）表 1 に同じ。

(3)第三期（1911～1949）：民間娯楽音楽期

この時期は中華民国時代に当たり、それまで宗教音楽として演奏されてきた洞経音楽が娯楽性音楽として、広く市民社会に広がっていった時期である。1911 年に辛亥革命が起こり、行政当局は「洞経会」活動を禁止したことにより[23]、これ以降、新中国成立(1949 年)までの約 40 年間に渡り、麗江地区の広い範囲で、民間の住民音楽団体「楽会」が盛んに設立されるようになる。こうした「楽会」は、音楽愛好者が自発的に組織した娯楽性の高い洞経音楽団体で、その多くが全く宗教性を有さないもので、祭典時の余興や余暇の娯楽として洞経音楽が楽しまれるようになった。参加者は商業従事者から農民まで社会の広い層に渡り、この時期にこれまでの富裕層の音楽であった洞経音楽が地域社会に広く普及、1940 年代には麗江地区で 100 以上の楽会を数えたといわれる[24]。この楽会が現在のコミュニティごとに存在する古楽会の母体となっている。

いう分業傾向があり、現在でも特に農村部ではこうした傾向が見られる。ナシ族女性の生活や文化については楊(1998), pp. 124-138、欧(2000), pp. 179-188、和(1995)などに詳しい。

[23] 麗江県共産党委員会・麗江県人民政府編(2000), pp. 444-470。なお「洞経会」「皇経会」ともに、その後も 1949 年まで「麗江音楽会」と名称を変更し、読経活動を続けていた。

[24] *Ibid.*

またこの時期のもうひとつの特徴は、このように洞経音楽が娯楽として民間に広く普及したことで、それまで純粋な民間音楽として演奏されてきた「ボシシリ（白沙細楽)」が洞経音楽と一緒に演奏されるようになり、洞経音楽および白沙細楽の総称として「ナシ古楽」という呼称が成立したことである[25]。なおナシ族社会においては白沙細楽も男性のみによって行われてきていたため、「ナシ古楽」としての楽会も、依然男性の成員だけからなり、女性の参加はなかった。

なお白華村（当時は白華郷）において初の民間音楽団体「白馬洞経会」が成立するものちょうどこの時期（1923 年）である[26]。

(4)第四期（1949～1978）：停止期

この時期は、共産革命による新中国成立、その後の文化大革命を経て、改革開放政策が採られるまでの時期に当たる。まず 1949 年に新中国が成立すると、音楽団体の組織的演奏活動は次第に衰えるようになる。ただし文化大革命が発動される 1966 年までは、祭典時の余興や政府行事等での演奏、集落レベルでの小規模で純粋な娯楽演奏の形式は存続したといわれる[27]。しかし文化大革命が発動されると音楽活動は反革命行為として全面的に禁止、麗江における音楽組織は全て解散、ナシ古楽活動は完全に停止することになる[28]。

(5)第五期（1978～1984）：復興期

この時期は文化大革命が終結（1976 年）し、改革解放政策（1978～）が採られるようになった時期である。詳細は次章で述べるが、この時期最も早くナシ古楽の復興に取りかかったのが白華村在住の民間音楽研究家の MD 氏であり、他の集落に先駆けて演奏会活動が再開されたのも白華村であった。1980 年代になるとこうした動きが麗江全域に広まり、解散していた楽会が復活し始めるようになる[29]。また 1984 年にはその後、麗江旧市街地で観光客向けの演奏会を大成功させ、ナシ古楽ブームの火付け役となった宣科氏が「大研納西古楽会」を設立している[30]。また、民間舞踏も住民生活の中で自然に復活している。

(6)第六期（1988 年以降）：ツーリストコンサート成立期

この時期は、ナシ古楽のツーリストコンサートが行われはじめ、次第に麗江の観光資源

---

[25] *Ibid.*
[26] 名称は「洞経会」であるが、実質的に宗教活動は行っておらず、娯楽性組織であった。高(2001), p. 136。
[27] *Ibid.*
[28] 戈・和(2000), pp. 150-151。
[29] *Ibid.*
[30] 音楽家の宣科氏（ナシ族）率いるナシ族高齢者中心の楽団で、ナシ古楽（洞経音楽）の演奏で内外に広く知られる。宣科氏はチベット暴動時に反革命分子として逮捕、1958 年から 1978 年までの 20 年間投獄され、その間獄中でナシ族の民族音楽の研究を行っていた。その後 70 年代末に解放されると、自ら発起人となって、ナシ族の退職老人十数人と十数種の楽器を集め、1984 年に「大研納西古楽会」を組織、1988 年 7 月より正式に対外演奏会を開始する。現在も旧市街地において、宣科氏自ら司会・指揮に立ち、観光客向けに毎晩 1 時間半の演奏会を行っている。国外公演も多く行っており、2001 年 5 月には東京及び高山市にて日本初公演が行われた。なお、宣科氏の活動内容については周(1999)に詳しい。

として定着した時期である。その先駆けとなったのが、1988 年に麗江旧市街地において観光客向けの演奏を開始した宣科氏率いる大研納西古楽会である[31]。その後、麗江における観光活動の活発化に伴い、ナシ古楽の観光客向け演奏も盛んになり、1998 年には麗江旧市街地の古楽会を母体に、ナシ古楽とトンバ舞、民間舞踏の全てを上演する「東巴宮」が設立されている[32]。ただし、トンバ舞については、文化大革命の時期にトンバの世代交代が完全に断絶してしまい、戦前からのトンバはわずか数名を残すのみになっている状態で、伝承が途絶えている状態である[33]。したがって東巴宮で上演されているものは観光用に復活・模倣・創作されたものである。また、1999 年からは白華村でも観光客向けのナシ古楽演奏および民間舞踏の披露が開始されている。

なお観光向け演奏の活発化に伴い、それまで文化的に男性のみであった古楽演奏に初めて女性も参入するようになったのがこの時期である[34]。

以上のような経緯を経て、現在麗江では、麗江旧市街地ならびに白華村において観光客向けのナシ族伝統音楽演奏が行われている。麗江旧市街地において観光客向けの活動を行っている 2 つの組織は、立ち上げ当初は麗江旧市街地の古楽会の組織を母体としたものであったが、現在はいずれも企業（郷鎮企業）の形をとる大規模な組織となっており、その団員は広く麗江県から集まっているため、地域社会との関連性はそれほど強くない[35]。一方、白華村の組織は本来の白華村古楽会を母体とした組織であり現在も成員全てが白華村住民からなっているという特徴がある。次章ではこの白華村における音楽団体を取り上げ、詳しく見ていくことにする。

3. 白華村における伝統的民族音楽の伝承組織と観光活動

3.1. 伝統的民族音楽に関する組織の成立と復興の経緯

史料によれば白華村に初めて民間音楽団体が組成されたのは第三期の 1923 年、「白馬洞

---

[31] 雲南省麗江地区行政公署・雲南省麗江地区地方誌弁公室(1999), p. 220。
[32] 詳細は後述する。
[33] 2001 年 9 月にヒアリングを行なった段階では 3 名とのことであった。現在、麗江県東巴文化研究所が次世代の育成に当たっている状態である。東巴文化研究所・副研究員・王世英氏へのヒアリングによる（2001 年 9 月）。
[34] したがって現在ナシ族社会で楽器を演奏できる女性は 20 代以下の若年層がほとんどである。孫(1998)など参照。
[35] 東巴宮は大研古城五一街文治巷古楽会を母体とているが、他からも広く成員を募集し、60 人強の成員からなる。設立時からの 10 数人の主要メンバーが 100 万元（約 1,500 間円）を共同出資する形で、民間企業（有限責任公司。日本の有限会社に相当する）としてスタートしている。以上、東巴宮演出家・楊宏氏へのヒアリングによる（2001 年 9 月）。一方、大研納西古楽会は当初、大研古城内の老人を宣科氏が集めて組成したものであったが、その後成員を広く集め、50 人強の団員を有する。1999 年には民間企業（有限責任公司）として登記している。資本金は全て宣科氏の出資による。会社登記以降は名称を「麗江宣科納西古楽文化有限公司」に変更。以上、同公司事務局でのヒアリングによる（2001 年 9 月）。

経会」[36]の設立にまで遡る。この「白馬洞経会」はその技術水準の高さから当時、麗江地区でも「特に名声の高い古楽団」と呼ばれていたといわれる。なお「白馬洞経会」とは、それぞれ自然村集落を基盤とする「文栄村古楽隊」と「吉来村古楽隊」の 2 団体から構成されており、実質的にこの 2 団体が活動単位となっていた。成員は男性からなり、多くの人材がいたという[37]。当時は住民の日常生活の中で非常に盛んに活動が行われたといわれ、現在、白華村の 80 歳以上の老人男性はほとんど全て演奏ができるとのことである[38]。

しかし第四期に入ると白華村においても音楽活動は次第に衰退し、1958 年の大躍進政策による農村の人民公社化、1966 年の文化大革命の発動を経て活動は完全に中止となった。ただし、当時のナシ族の一般市民は表面的には意思表示しなかったものの、文化大革命に対しては否定的に捉えるものが多く、家屋の壁面に施された伝統的な絵画や彫刻を、紅衛兵の破壊活動から守るため、わざとその上に漆喰を塗り、毛主席のスローガンを貼ることで保存し続けていたという[39]。伝統音楽についても、当時の政治環境下、ナシ古楽が演奏できないながらも「麗江の住民は古楽のことを気に懸け、文革によって破壊されてしまうことには耐えきれなかった」と言う[40]。

その後 1976 年に文化大革命が集結して程なく、当時麗江県文工隊（音楽・演芸・歌舞・演劇などを行う文芸組織）の責任者であった、黄山鎮白華村在住の MD 氏が、麗江地区で最も早くナシ古楽の復活に乗り出す。MD 氏はまず 1960 年代初等にレコードとして録音され当時まで残っていたナシ古楽の楽曲全てを、楽譜におとす作業に取りかかり、略譜[41]を作成、これをガリ版印刷し各地の楽士に提供した。「文栄村古楽隊」と「吉来村古楽隊」も 1970 年代末には復活し、音楽活動を再開している[42]。またこの時期の MD 氏のナシ古楽復興活動には目を見張るものがあり、1980 年からは氏の書き起こした略譜が地方雑誌『玉龍山』に連載されるようになり広くナシ族社会に共有されるとともに、彼自身は、略譜の元となったレコードとレコード・プレーヤーを背負い麗江県下の農村を訪れ、それを放送してまわったという[43]。このようにして、約 20 年間途絶えていたナシ古楽が麗江において再び演奏され始めるようになっており、白華村において最も盛んに復興が進んだ背景にはこうした白華村出身の MD 氏の活躍が大きかったと言える。氏は現在も白華村在住で、黄山鎮における伝統的民間音楽の指導者的立場にある[44]。

このようにして現在に至るまでには白華村下の全ての集落（自然村）で古楽会が復活、

---

[36] 当時の黄山鎮の行政区画名が麗江県「白馬里」であったことに由来する。
[37] 高(2001),p.136。
[38] 民族音楽研究家 MD 氏へのヒアリングによる（2001 年 9 月）。
[39] 旧市街地および農村部の一般家庭でヒアリングをするとほとんどどの家庭でもこの話が聞かれる。
[40] 戈・和(2000),pp.146。
[41] 中国でよく用いられる略式の楽譜で、「簡譜」と呼ばれる。数字の 1-7 で音階を表記する。
[42] 両者を併せて「白華村古楽会」と呼ぶことが多い。戈・和(2000),pp.150-151。
[43] 戈・和(2000),pp.150-151。
[44] MD 氏（男・ナシ族）は 1947 年白華村生まれ。中学卒業後、1967 年から麗江県文工隊に勤務、現在に至る。1986 年から 1999 年までは県文工隊の隊長を務める。文化大革命終結以降、一貫してナシ族の伝統的民族音楽の復興作業に当たっている。本人へのヒアリングによる（2001 年 9 月）。

昔ながらの活動を復活、祝祭典や、冠婚葬祭において演奏を行っている[45]。

3.2. ツーリストコンサートのための演奏組織の成立

1999 年以降、白華村における「農村民俗観光」振興[46]に伴い、観光演奏のための組織が現在 2 つ設立されている。ひとつは旅游開発公司が設立した「黄山鎮表演隊伍（黄山鎮表演隊)」、そしてもうひとつが接待農家[47]が集中する文栄自然村の伝統的古楽隊（文栄村古楽隊）の再編成による「黄山鎮白華村民間歌舞隊」である。以下、その組織の詳細についてまとめる。

(1) 黄山鎮表演隊伍（黄山鎮表演隊）

旅游開発公司は 1999 年 5 月の設立[48]とともに、旅行社経由で誘致した団体観光客に対してナシ古楽および民間舞踏の上演が必要な際、公司が派遣するために公司直属の歌舞団設置を決定、早速黄山郷(当時）下の古楽隊メンバーや 10～20 代の若者から男女約 100 人を募り、同年 12 月に正式に「黄山郷表演隊（設立時の名称。以下、表演隊)」を設立している。旅行社から団体観光客の予約が入り、音楽演奏を依頼された場合、公司が電話でメンバーを召集し、指定された農家へ派遣、演奏・演技を行う、という仕組みでスタートした。また公司は表演隊の団長兼指導者として、白華村在住のナシ族民間音楽研究の第一人者である、前述の MD 氏を指名、ナシ古楽の未経験者も多かったため、設立当初は MD 氏の指導の下、ほぼ毎日のように村内（主に旅游開発公司の 1 階部分など公司が手配した場所）で稽古を行っていた[49]。

写真 1　雲南省政府関係者の視察に際し民間舞踏を披露する黄山鎮表演隊

（出所）筆者撮影（2000 年 5 月）

---

45 黄山郷人民政府(2000), p. 10。
46 白華村における「農村民俗観光」振興の詳細に関しては拙稿（山村 2004）を参照されたい。
47 「接待農家」(現地では「接待農戸」と呼ばれる）とは、地元行政から観光業の営業を許可された農家のことを指す。詳細は拙稿（山村 2004）を参照。
48 黄山鎮郷村民俗旅游開発有限公司の設立経緯については拙稿（山村 2004）に詳しい。
49 黄山鎮郷村民俗旅游開発有限公司でのヒアリングによる（2000 年 6 月)。筆者もこの現場を確認した。

実際の活動としては、政府の行事や行政関係者の視察などがある場合には彼らが演技をすることがほとんどであったのだが、団体観光客で音楽を聴きたいと予約を入れる場合はそれほど多くなく、「頻繁にお金をかけて練習をする割には演技をする機会は少なかった」とのことである[50]。

(2)白華村民間歌舞隊（通称：農家演唱隊）

上記のような公司の表演隊の実状に対して、白華村のリーダーのひとりである WL 氏[51]が、旅游開発公司の表演隊設立計画に対して「定期的に多くの金をかけて練習をするのは無駄が多すぎる。そもそも古楽は農閑期に楽しんできたものであり、農業が閑なときに練習をして、お客さんが希望すればすぐに近所の人間が集まって演奏をすればよいことだ」と反論、そのためには既存の古楽会活動の延長線上で観光客向け上演を農家自身が行うことにこそ利点があると強調、1999 年 9 月に友人である、前述の民族音楽研究者・MD 氏とともに白華村民間歌舞隊（通称：農家演唱隊）を設立した[52]。農家演唱隊の概要を表 3 に示すが、既存の文栄村古楽隊を母体として、それに集落（文栄自然村）内の婦女子もメンバーに加えることで、組織を成立させている[53]。練習は農閑期に MD 氏の自宅中庭で行っている。WL 氏は、こうした活動の目的について「観光客とともに楽しめる活動を作成し、白華民俗村における農村民俗観光の内容を豊かにすることで、ナシ族の民族文化を観光客により良く紹介できるようにすること」にあるとしている[54]。

なお、いずれのメンバーも近所に住む顔見知りであり、文栄村内にある接待農家で演奏が必要な場合は、接待農家の主人がメンバーに電話をすることですぐに集まることが可能となっている。また旅游開発公司の表演隊が団体旅行者にしか対応していないのに対し、農家演唱隊は個人旅行者を含めた全ての観光客に対応しており、中間に旅行社や旅游開発公司を通さずに、直接観光客から依頼を受ける体制となっている。実際にこの体制は柔軟性に富み、例えば公司の表演隊が公司の料金表によって決められた演目にしたがってきっちりと上演するのに対して、農家演唱隊では観光客がナシ族伝統音楽の中で特に見たい演目等がある場合、その場で自由にアレンジできるという利点がある。また演奏後、観光客から感想を直接聞き、それを次回の演奏に活かしていくという点でもこうした体制は有利に作用している。こうした結果、彼らの演奏は観光客から非常に高い評判を得ている[55]。

---

[50] MD 氏へのヒアリングによる（2001 年 9 月）。
[51] WL 氏（男・ナシ族）は 1945 年白華村生まれ。1967 年に中国共産党入党。人民公社時代に当地の生産体長を努める。白華行政村村長（1983～1992）、共産党白華村支部書記（1992～1999）を歴任。1999 年に白華民間歌舞隊を組織、隊長に就任。本人へのヒアリングによる(2001 年 10 月)。
[52] WL 氏へのヒアリングによる(2001 年 9 月)。
[53] ただし表演隊、農家演唱隊ともに、女性は、伝統的に女性が行ってきた歌と踊りを披露することが中心で、都市部の大研納西古楽会や東巴宮で見られるような楽器演奏にまでは未だ参入していない。この点については農村部の伝統的な男女の役割分担が依然強く残っているためだと考えられる。
[54] WL 氏へのヒアリングによる(2001 年 9 月)。
[55] 筆者は WL 氏宅に長期滞在中に何度も観光客向け演奏を聞く機会があったが、国内外、団体・個人の差に関わらず、非常に好評を博していた。また演奏が終わると、毎回、観光客に、演奏活動をはじめとして提

表 3　白華村民間歌舞隊（通称：農家演唱隊）の概要

名称	白華村民間歌舞隊（通称：農家演唱隊）
組織形態	完全な民間組織
隊長	WL 氏（会計、出納を兼任）
音楽・舞踏指導	MD 氏、WL 氏
設立年	1999 年 9 月
隊員数	13 名（うち男性 5 名、女性 8 名。文栄村古楽隊を母体とする。全て白華行政村文栄自然村在住の農家で、年齢層は 20～50 才代が中心）
設立目的	・観光客とともに楽しめる活動を作成し、白華民俗村における農村民俗観光の内容を豊かにすること。 ・ナシ族の民族文化を観光客により良く紹介できるようにするため。 ・増収は直接の目的ではない。その結果として派生してくるもの。
活動内容	①観光客に対するナシ古楽の演奏、伝統舞踊の上演。（演奏は接待農家の中庭で行う。金・土・日曜日に行われることが多い） ②ナシ古楽、伝統舞踊の練習（普段は MD 氏の家で行う。農閑期の夕方～夜。普通、火・水・木曜日）
活動による収益	・固定給与はない。 ・観光客向けの演奏による経済収入は会計・出納係の責任のもと分配。1 回の演奏（約 30～1 時間程度）で 20 元／1 人程度。 ・余剰は今後の活動経費目的の基金としてプール。

（出所）白華民俗歌舞隊(隊長)WL 氏へのヒアリング(2001 年 10 月)ならびに「農民増収話題 13：開発民俗旅游致富」麗江日報,2000 年 10 月 19 日版,第 2 面をもとに筆者作成。

3.3. 観光収入の分配方式から見た農家演唱隊の特徴

上述したように、現在、白華村において観光演奏活動を行う組織としては、旅游開発公司が組成したものと、既存組織を観光向けに再構築したものとの 2 つの組織が並存する情況となっているが、両者の組織運営上の差を収益分配の構造に顕著に見ることが出来る。ここではこれら両者の運営における住民の意思の反映状態を把握するために、上演による観光収入の分配方式に着目し、両者の分析を試みる。

先にも述べたように、表演隊は、団体観光客を引率する旅行社からの依頼があった場合に観光開発公司を通して各接待農家へ派遣される形をとる。そしてこの場合、接待農家が営業開始の際、公司と契約を結んだ際に締結した協議書[56]にしたがい、そこに示された比率に基づき、公司、表演隊、農家の 3 者で収益の分配を行わなければならないことになっている。表 4 は、団体観光客 10 人に対して接待農家が食事付で音楽・舞踊のサービスを提供するとき、旅游開発公司を通して表演隊を派遣した場合と、旅游開発公司を通さずに農家演唱隊が演技を行った場合について、農家の収益構造を比較したものである。公司を通さず、農家演唱隊による演奏を行った場合の方が、演技者一人当たりの収入が 2 倍となっていることがわかる。表演隊の場合、先にも述べたようにその成員は黄山鎮全体から集められた人間によって構成されており、派遣されるメンバーが、接待農家が位置する集落とは別の集落の成員からなる場合も多い。こうした場合、接待農家と表演隊の成員とは親しい間柄にはないことが充分あり得る。しかし一方で農家演唱隊の場合は、既存の古楽会が母

供した全てのサービスに対して「何か不満な点、改善すべき点」はないか必ず感想を聞いていた。
[56] 黄山郷村民俗旅游開発有限公司(2000)。

体であり、成員は全て集落内（文栄自然村）の居住者である。したがって演唱隊の成員と接待農家が親しい関係にあるばかりでなく、その成員の中に接待農家の家族や親戚が含まれる場合も往々にしてある[57]。このように、農家演奏隊が実際のコミュニティ規模から構成されていることは、接待農家と農家演唱隊メンバーが親しい間柄であることを示しており、農家演唱隊構成員の家が次回の演奏会場となることも多いにあり得る。こうしたことが主催した農家の取り分を押さえてでも、農家演唱隊メンバーの取り分を多くしていることの背景として考えられる。

表 4　農家の収益構造（10 人の団体に一人当たり 35 元のコースを提供した場合）

A）旅游公司＋表演隊＋農家の場合

	比率	分配額（元）
旅客一人当たり支払額		37
売上総額	100.0%	370
旅游開発公司	13.5%	50
旅行社手数料	5.4%	20
農家純収入	54.1%	200
表演隊	27.0%	100
表演隊一人当たり収入		10

B）農家＋農家演唱隊の場合

	比率	分配額（元）
旅客一人当たり支払額		35
売上総額	100.0%	350
農家純収入	42.9%	150
農家演唱隊	57.1%	200
演唱隊一人当たり収入		20

（出所）黄山郷村民俗旅游開発有限公司(2000)ならびにヒアリング（黄山鎮郷村民俗旅游開発有限公司：2000 年 5 月、白華民俗歌舞隊（隊長）WL 氏：2001 年 9 月）をもとに筆者作成。
（注1）表演隊および歌舞隊はそれぞれ 10 人として計算。
（注2）「旅游公司＋表演隊＋農家」の場合は、旅游開発公司と農家間で締結される「協議書」により、旅客一人当たりに対して、旅游開発公司が 5 元、引率旅行社が 2 元の手数料をとることと規定されている。
（注3）「農家＋農家演唱隊」の場合の比率は、筆者が参加した 2001 年 9 月 21 日の WL 氏宅での夕食時の実態に基づく。なお、農家＋農家演唱隊の場合は、特に文章化された規定の比率は存在しないそうだが、WL 氏によれば、当日の収入に応じて戸主と歌舞隊が適切に分配を行っているとのことである。

なお、文栄自然村以外の集落では現在のところ民間の娯楽性組織としての古楽会は存在するものの、観光客向けの演奏組織は成立していない。これは、現在営業を行っている接待農家のほとんどが白華村の中の文栄自然村に位置しており、その他のエリアにはそれほどツーリストコンサートの需要がないためだと考えられる。なお現状では、これら文栄自然村以外の集落においてツーリストコンサートが必要な場合には、必然的に旅游開発公司に連絡し表演隊の派遣を依頼することになる。

こうした点については、「ひとつの村（自然村）がひとつの大家族」[58]という言葉であら

[57] 例えば筆者が参加した WL 氏宅で開かれた演奏会(2000 年 9 月 21 日)においては、世帯主の WL 氏、ならびにその奥さん、弟という身内 3 人が歌舞隊として演奏・上演を行っていた。当日は日本からの視察団が訪れており、筆者は現地にてこの団体の旅程コーディネイトを行い、当日は WL 氏宅において演奏会の裏方として働いた。団体の人数は 10 名で、ナシ族料理+ビール+自家製酒+ナシ古楽の演奏と民間舞踏の演技（1 時間）で 10 名合計 350 元（5,250 円）であった。
[58] 黄山鎮人民政府でのヒアリングによる（2001 年 9 月）。

わされるように、農村部においては自然村の範囲が伝統的なコミュニティ範囲として認識されており、観光開発に際しても「同じ村（自然村）は家族と同然だから、うちの客はとなりの客」[59]であるとする村人の意識が強く作用しているものと考えられる。

また、このように農家自身が積極的に音楽組織の観光産業向け再構築を始めた背景には、個人観光客や公司・旅行社を通さない団体旅客が増加の一途にあり、農家自身も旅游公司頼みの団体観光客よりも、自分たちで個人観光客を誘致・管理することの必要性に迫られている点も指摘しておく必要があろう。このことは既に山村（2004）においても報告しているように、旅游開発公司に対する不満と、農家自身による「協同組合」設置に向けた動きともなって表れている。

4. 伝統的民族音楽にかかわる組織の未来：「農家演唱隊」と「伝統芸能博物館計画」を巡る地域の葛藤

4.1.「伝統芸能博物館」計画と第三のツーリストコンサート組織

こうした農民自身の動きの一方で、旅游開発公司は 2001 年、麗江旧市街地（大研古城）の民間資本である「東巴宮」の投資を誘致し、白華村の中心部にある農民広場に敷地面積 9.88 畝（約 0.66ha）の「麗江東巴宮黄山民間博物館（伝統芸能博物館）」を建設し、ナシ族民間音楽関連資料の常設展示を行うとともに、観光客向けにナシ古楽とトンバ舞、民間舞踏の上演を行うことを決定した[60]。「東巴宮」とは、1998 年に成立した麗江旧市街地で観光客向けに演奏活動を行う民間の音楽団体であり、資本金 100 万元（約 1,500 万円）を有する民間の郷鎮企業（有限責任公司。日本の有限会社に相当する）である。組織の母体は麗江旧市街地（大研古城）にあった古楽会のひとつ五一街文治巷古楽会であるが、企業設立にあたり、他からも広く成員を募集し、現在 60 人強の成員からなる。麗江旧市街地において毎晩観光客向けの演奏会を行い大成功を納めている組織である[61]。

当初、旅游開発公司側は「旅游開発公司の表演隊は、観光客が多いときは、接待農家を一戸一戸、順々にまわって行かなくてはいけない。したがって、観光客を一カ所に集めて伝統文化を上演出来る場所が必要である」との考えから、農民広場に「接待中心（観光客向けの情報提供を行なうサービスセンター）」ならびに伝統芸能を披露するスペースを確保することを計画していた[62]。関係者によれば、その後、こうした空間を整備するための予算を「郷政府（当時）で確保することが困難」となり、「黄山郷商業開発項目（当時）」の一環として行うことを決定、大研古城の東巴宮が投資を行い、その後の博物館の運営も東巴

[59] 接待農家 MW 氏へのヒアリングによる(2001 年 9 月)。
[60] 黄山郷（当時）人民政府の郷長秘書 WS 氏へのヒアリングによる（2001 年 9 月)。
[61] 東巴宮でのヒアリングによる（2001 年 9 月)。
[62] 黄山鎮郷村民俗旅游開発有限公司でのヒアリングによる（2000 年 5 月)。

宮が行うことが内定したという[63]。東巴宮の責任者によれば、博物館には東巴宮のメンバーが常駐する予定で、ナシ族民間音楽の研究・保存活動を行うとともに、観光客向けの演奏も行うとのことであった[64]。

ところが 2007 年 1 月現在、現地では「接待中心」が完成し稼動しているものの、東巴宮はその運営にかかわっていない。また、広場は 2001 年時点とほぼ変わらない状態で、イベント時以外は駐車場として利用されている。博物館は着工すらされていなかった。

4.2. 民間音楽組織の今後：住民・公司・地元行政の関係性に見る課題

大研古城における東巴宮の活動は、観光の場を利用しながら消失したトンバ舞などの伝統芸能の復活に取り組み、広義の地域住民（都市住民）を再組織化することで、文化観光を成立させており、都市部である麗江旧市街地が、広域的な文化の中心として機能していくうえで大きな貢献を果たしているものである。こうした意味で、東巴宮の活動自体は観光文化の自律的創出プロセスから見て高く評価されるべきものである。また、2001 年に計画された伝統芸能博物館についても、東巴宮側の目的は単なる商業経営だけでなく、メンバーの中にいる洞経音楽やトンバ舞の民間研究者を中心として、黄山鎮で「民間音楽の調査を行い」、「ナシ族の後代のために、無形文化の研究・保護を行い、新たに建設される博物館へ保存したい」と、黄山鎮の文化資源保護への貢献を表明しおり、こうした面で大きな貢献が期待されるものである[65]。

当然こうした文化資源の保存・継承に関する取り組みは黄山鎮にとっても大いに歓迎されるべき活動であると考えられるが、現状はその計画が遅々として進んでおらず、事実上立ち消えとなっている。こうした状態になっている具体的背景については公表されておらず、ヒアリング等でも事実関係を把握することはできなかった。しかしながら、複数の住民へのヒアリング結果を総合すると[66]、住民側に本計画が「黄山鎮の地域社会やの発展に貢献しないのではないか」という危惧があることがわかった。こうした住民側の不安を依然として解消できていないことが計画の進まない一因となっていることが推測される。具体的には以下のような危惧･不安である。

第一に、投資および経営（特に伝統芸能の商業公演）の主体が黄山鎮や白華村と関係を有さない点。すなわち、東巴宮の母体は大研古城の古楽隊であり、またその他のメンバーもこのように投資およびその後の運営も村外の資本が行うことにより、博物館運営については地元に利益が還元されない可能性が充分に考えられる。第二に伝統芸能の公演についても、黄山鎮の住民が参加できない体制で進められる可能性がある点（東巴宮側は既に自前のメンバーを有しており、またその他のスタッフも広く麗江市から公募する予定である

---

[63] 「黄山郷商業開発項目」とは黄山郷政府（当時）が郷下の経済開発のため、外部資本の誘致を行うプロジェクトのこと。黄山鎮郷村民俗旅游開発有限公司でのヒアリングによる（2001 年 9 月）。
[64] 東巴宮でのヒアリングによる（2001 年 9 月）。
[65] 東巴宮でのヒアリングによる（2001 年 9 月）。
[66] 白華村での住民へのヒアリングによる（2001 年 9 月、2003 年 3 月、2004 年 6 月、2005 年 3 月、2006 年 5 月、2007 年 1 月）。

ことを表明している[67]。もしそうなれば、目下、ツーリストコンサートの担い手として順調に展開を続けている住民組織「農家演唱隊」の活動と、ほぼ同様の演目が大規模、且つ住民と関係のないところで行われることになる。これでは農家演唱隊の活動の活性化につながらないばかりか、場合によってはせっかく萌芽したツーリストコンサートの成長に負の影響を与えてしまう恐れもある。

この博物館計画については、これまで鎮政府、旅游開発公司、そして東巴宮の 3 者間で話が進められてきたのだが、集落のリーダーである WL 氏や白華村における民間音楽研究者 MD 氏、接待農家は全くその議論に加わっていない。1999 年の白華民俗村の立ち上げ当初は、鎮政府や上級政府と農家を結び観光開発に関わる事項を調整する、第三者組織としての機能を発揮していた旅游開発公司であるが[68]、この博物館計画については完全に鎮政府側と一致して動いており、農家との調整は行っていない。すなわちこの開発案件に関しては農家側の意見を集約する場が無く、地域社会が意思決定プロセスや運営部門に参画できなかったことになる。このように鎮政府と旅游開発公司が資本導入を重視する一方で既存組織の活用を充分に行えていない点は、地域の自律性という観点から見て、大きな課題を孕むものであると言えよう。一方こうした鎮政府と公司のやり方は、接待農家側にますます不信感を募らせる結果となり、接待農家自身が協同組合方式で旅客誘致・管理を全て行う方向で動き始めている。ただし行政･公司・農家間の調整はなかなか進んでおらず、2007 年 1 月現在、こうした民衆組織は正式には未だ成立していない[69]。

5. まとめ

本稿では、民間音楽組織に着目し、その変遷過程と観光開発との関わりについて見てきた。その結果、伝統的民族音楽の商品化のプロセスにおいて、大きく以下のような流れが確認された。

1) 観光開発開始当初、旅游開発公司が黄山郷(当時) の範囲で成員を募集し、公司の下部組織として「黄山郷表演隊（当時)」を設立する。
2) 一方同じ時期、「表演隊」計画の運営上の非効率さを問題視した集落のリーダーである WL 氏が、既存の民間音楽組織（文栄村古楽隊）をツーリストコンサート向けに再構築し、農家演唱隊として活動を始め、観光客に好評を博するようになる。
3) こうした中、当初観光客を村内の一カ所に集め「表演隊」の演技を効率よく魅せられるように計画されていた「サービスセンター」計画が、鎮政府では予算が捻出できないこ

[67] 東巴宮でのヒアリングによる（2001 年 9 月)。
[68] 旅游開発公司の第三者組織としての機能については山村（2004）に詳述している。
[69] WL 氏へのヒアリングによる（2007 年 1 月)。

とから、外部資本の誘致により開発を行うことが決定。大研古城の音楽団体（民間企業）が投資・運営を行うことになり、「伝統芸能博物館」として整備されることになる。

4) しかし計画から 6 年を経過しても博物館計画は実現していない。その背景として、住民側に経済的にも民族音楽の保存･継承の面でもメリットが無いと住民自身が感じている点、農家・公司･行政の間の調整がうまくいっておらずこうした住民の不安を解消できていない点などが考えられる。

では本事例に見られる観光開発の枠組みは、地域住民が主体性を発露していくうえでどのような利点と問題を有しているのだろうか。上述した伝統的民族音楽の商品化プロセスにおける複数のアクター（住民、旅游開発公司、地元行政など）間の関係性と役割のあり方に着目し、以下考察を試みてみたい。

①開発の初期段階においては、旅游開発公司が農民を組織化し音楽団体「表演隊」を組成した。ただしこの際、既存の組織を活用しなかったこと、成員の募集が複数の集落を含む範囲で、実際に接待農家が位置するコミュニティと一致していなかったこと、などの理由から「表演隊」の活動はうまくいっていない。こうした意味から公司が試みたツーリストコンサート活動での住民の組織化は成功しなかったと言える。

②一方、こうした情況を適切に判断した集落のリーダーと音楽研究者により、既存の伝統的組織の再構築が行われ、これまで参加のなかった女性も成員に加わることで、観光向けの「農家演唱隊」が成立する。このプロセスはまさに観光開発が進む中で、地域住民が自文化に対する自意識を高め、アイデンティティが育成されることで、住民の伝統に根ざした観光向けの文化、いわゆる「観光文化」が創造された過程だと言える。さらにこの演唱隊の設立によって、農家女性は、これまで男性によって演じられてきたナシ古楽活動という自文化に触れることが可能となり、さらに観光産業への参画を促し、観光収入を得ることも可能となった点は注目に値する。

③村内に持ち上がった新たな博物館計画は鎮政府、旅游開発公司および投資者の東巴宮によって開発計画が決定されてしまっており、意思決定プロセスに住民や演唱隊は全く参画できなかった。このことは本来、接待農家と共同経営体制を採るとの目的で設立されているはずの旅游開発公司が、農家の利益を代表する組織として、地元行政と農家の間を調整するという機能を発揮せず、完全に行政の一部となっていることを示す。

④その一方で、農家自身も流通・誘致、開発計画に参画するための意見を集約する民衆組織を協同組合として設立しようと動き始めたが未だ形成はされていない。つまり農家側からすると、旅游開発公司が本来の機能を果たさない現状では、農家の個人経営のレベルとマクロなシステムとの折り合いを付ける方法がない状態となっている。

このように、目下、地域住民自身が自律的に伝統的組織の再構築を行いツーリストコンサートの実施には至っているのだが、地域住民と地元行政との関係性や、マクロな経済シ

ステムとの調整を取る組織や方法が曖昧な情況であること、地域住民自身の意見を集約し、それを開発計画に反映する方法が確立されていないこと、などが課題として挙げられよう。なお中国の村落共同体には「基層群衆性自治組織」（大衆性自治組織）として村民委員会（行政村レベル）および村民小組（自然村レベル）が存在し、制度的には自治の体制を採っているのだが、今回の白華村における観光開発の事例では、こうした組織が何ら観光開発に関与していなかった。つまり大衆性自治組織としての村民委員会や村民小組が観光開発に関する意見集約の場としては機能していないと言える。

その一方で本事例の現状では、数人のリーダーの強い行動力で当事者の意見が集約され行動に移されているかのように見える。この背景としては大きく以下の 2 点が考えられよう。まず一点目として、白華村における観光開発方式が地元行政から営業許可を与えられた農家（接待農家）によるものであり、現状では特定の接待農家しか主体的に観光産業に参入していない。したがって集落の問題としてよりは当事者の問題として観光開発が位置づけられていることが背景としてあると見ることができよう。こうした意味では農民から提案されているような協同組合方式は当事者組織として有効であると思われる。

そして二点目は、中国における村民委員会および村民小組の主たる機能が村民の意見の集約ではなく、上級政府、すなわち上位の行政区分の共産党委員会決定を住民に徹底することに重きを置いていることがある[70]。事実、山村（2004）で既に示しているとおり、これを徹底するために、村民委員会に対しては共産党行政村支部、村民小組に対しては党小組、という共産党組織がそれぞれ指導・監督を行うために設置されている[71]。なお文栄自然村においては、村民小組の成員は 9 名（委員会主任 1 人、副主任 2 人、会計 1 人、出納 1 人、委員 4 人）であるのに対し、党小組は 22 名の党員からなる[72]。これに対して「自然村は家族同然」という言葉が聞かれたことからもわかるように、そもそも 100 戸程度からなる自然村自体が歴史的に非常に強い結びつきを持っており、実際に住民間の問題解決をはかる場は、こうした政治上の自治組織ではなく、伝統的な集落範囲である自然村の中で、人望のあるリーダーを中心に議論が行われることになるのである。なお、こうしたリーダーは人望があり、結果として直接選挙により行政村村長や村民小組の主任として選出される場合が多いが、政治上の自治組織の機能と伝統的な集落での自治のあり方とは目的も意味も異なるため注意が必要である。

以上を踏まえると、白華村において創出された伝統的民族音楽に基づくツーリストコンサートを持続的に発展させていくには、伝統的な集落の範囲を重視した上で、当事者の意見集約が可能となる組織の設置がまず早急に望まれよう。

本稿で報告したような中国における伝統的民族音楽と観光開発とのかかわりに関する調

[70] 福永(1993), pp. 32。
[71] なお村落における党組織はいずれも住民であり且つ党員であるメンバーから組成されている。
[72] 高(2001), 96-97。

査・研究はほとんど手を付けられておらず、本邦においても宗、山村などによって緒に就いたばかりの分野である。したがって理論化には到底至っていない。本報告もあくまで事実関係の整理の域を出ておらず、今後、継続調査を通して、問題の明確化と実証的な分析を行っていく必要がある。そしてそうした研究を通し、ユネスコや ICOMOS 等の国際組織においても重要なテーマになりつつある、音楽のような無形文化遺産とその観光活用に関して理論的枠組みを構築していくうえでの一助となることを目指したいと思う。

参考文献

趙銀棠
1984『玉龍旧話新編』雲南人民出版社。
福永安祥
1993『中国と東南アジアの社会学』勁草書房
戈（Ge）阿幹・和暁丹著
2000『王国之夢－顧彼得與麗江』雲南教育出版社。
石川栄吉・梅棹忠夫・大林太良・蒲生正男・佐々木高明・祖父江孝男
1994『文化人類学事典』弘文堂。
石森秀三編
1991『観光と音楽』（民族音楽叢書第 6 巻）東京書籍。
石森秀三
1991「観光芸術の成立と展開」石森秀三編『観光と音楽』(民族音楽叢書第 6 巻)pp.15-36, 東京書籍
郭大烈
1998『納西族風情録』四川民俗出版社。
高発元編
2001『雲南民族村寨調査・納西族－麗江黄山郷白華村』昆明：雲南大学出版社。
黄山郷人民政府
1998「黄山郷旅游事業発展規劃」（1 月）
黄山郷人民政府
2000「建設黄山納西族民俗文化旅游村－可行性研究報告」（10 月 2 日）
黄山郷村民俗旅游開発有限公司
2000「協議書」（農家との契約のための書式,5 月）
麗江県共産党委員会・麗江県人民政府編
2000『麗江文化薈萃』宗教文化出版社。
李群育
1999『新編・麗江風物誌』雲南人民出版社。

欧之徳
2000『世界瑰宝・麗江四方街』解放軍文芸出版社。
周文林編
1999『宣科与納西古楽』雲南美術出版社。
孫敏
1998「穿越時空的古楽」『山茶』1998 年第 3 期号（総第 95 期）, 山茶雑誌社, pp. 28-41。
宗婷婷
2007「麗江・ナシ古楽の社会的変遷―復興から観光化へ」中部大学大学院国際人間学研究科博士学位論文。
雲南省麗江地区行政公署・雲南省麗江地区地方誌弁公室
1998『麗江年鑑 1998 年版』雲南科技出版社。
雲南省麗江地区行政公署・雲南省麗江地区地方誌弁公室
1999『麗江年鑑 1999 年版』雲南科技出版社。
山村高淑
2004「中国農村部における集落観光の開発方式と住民参与：雲南省麗江納西族自治県黄山郷白華行政村の事例」西山徳明編『文化遺産マネジメントとツーリズムの現状と課題』国立民族学博物館調査報告 51, pp. 13-51。
楊福泉
1998『多元文化與納西社会』雲南人民出版社。
和鐘華
1995『納西族在女神的天地里』雲南教育出版社。
全国人民代表大会常務委員会
1999 年「中華人民共和国城市居民委員会組織法」。

2007 年 7 月 1 日　　受理
2007 年 8 月 17 日　　採用

北海道大学観光学高等研究センター
観光創造研究　No.1

発行日　2007 年 8 月 20 日

査読委員：

佐藤誠　（査読委員長：北海道大学観光学高等研究センター教授）

石森秀三（北海道大学観光学高等研究センター教授）

敷田麻実（北海道大学観光学高等研究センター教授）

吉田順一（北海道大学観光学高等研究センター教授）

発行：

北海道大学観光学高等研究センター

〒060-0817　北海道札幌市北区北 17 条西 8 丁目

Center for Advanced Tourism Studies, Hokkaido University

N17, W8, Kita-ku, Sapporo, Hokkaido, 060-0817, JAPAN

表紙デザイン：

©Takayoshi Yamamura 2007

★ Center for Advanced Tourism Studies ★